

「まちづくり」と時計

都市プランナー

田村明

公共の時計は高く聳えて……

時計は庶民にとつては貴重なものだった。

でっぴりした紳士が、チョッキのポケットから、おもむろに大きな懐中時計を取り出す。明治時代を扱った映画や演劇などでは、こういう光景がよくある。時計を持っているということは大変なステイタス・シンボルだった。

昔の帝国大学の優秀な卒業生には「銀時計」が与えられ、銀時計組などという言葉もある。もちろん、これは懐中時計だ。銀時計は文明を現す象徴でもあったのだろう。

個人が時計を持っていない時代には、正午に空砲を打つ。正午のことを「ドン」といった。都会の中にもたくさん寺があつて、和尚さんや小坊主が朝晩に鐘を撞いていた。それを聞いて、こどもたちは夕焼け空を見上げながら家路についたものだった。

個人が時計を持っていないのだから、町の目立った所に時計があれば助かる。正確に刻々と時を刻んで何時何分まで分かる。とくに定時で運行している文明の象徴であった鉄道の駅には欠かせないものだった。分の単位で正確に物事を動かしたのは鉄道からだろう。

大勢に時を知らせるには、公共の時計は、できるだけ高い所がいい。白秋の童謡にある『この道』では「あの丘は　いつか見た丘　ああ　そうだよ　ほおら白い　時計台だよ」と歌っている。時計台は高いところになければならない。丘の上にさらに高く聳えていた。この時計台は、おそらく学校や病院などの公共的な施設の中央を特に高くした時計台だろう。建物の高くなっている塔部分にはほかの機能はなく、時計を見せるために、わざわざ高くしたわけだ。遠くの人に時を知らせるには、無駄

にも意味があつたのだが、時間を知るだけでなく、その姿に何故か郷愁を抱いたものだ。

私がこどものころ住んでいた目黒の柿の木坂の家からは、二キロ近く離れている東京工大の白い時計台がよく見えた。途中に遮るような建築物は一切なかったからだ。今は全

病院などの公共的な施設の中央を特に高くした時計台だろう。建物の高くなっている塔部分にはほかの機能はなく、時計を見せるために、わざわざ高くしたわけだ。遠くの人に時を知らせることは、無駄

にも意味があったのだが、時間を知るだけでなく、その姿に何故か郷愁を抱いたものだ。

私がこどものころ住んでいた目黒の柿の木坂の家からは、二キロ近く離れている東京工大の白い時計台がよく見えた。途中に遮るような建築物は一切なかったからだ。今は全く見えない。

街のなかでは銀座四丁目の服部時計店の時計があまりにも有名だった。ここは時計台というよりも、全体がビルになっていて、そこをさらに少し塔状にしてある。銀座に行くとき誰でも一度はこの時計に目をやった。時計があることが高級イメージを与えていたものである。

街を印象づける時計たち

戦前、中学に入學したときに、父親が腕時計を買ってくれたのは、大人になったような気がして嬉しかったものだ。ところが、今では個人で時計を持つことは、あまりにも当たり前で、その有難みが分からぬ。戦前の十銭ぐらいにしか当たらない現在の千円たらずのお金で、巻く必要もない正確な時計が買えるなんて夢のような話である。

個人が時計を持つのが普通になると、正確に時刻で発車している駅のような所以外に、公の場所に時計を置く意味は減ってきた。

それでも、都市の公共の場の時計が必要なくなったとも言えない。腕時計を持っているからといって、しょっちゅう時刻を見ているわけではない。ふっとして街にある時計を見て急に用事を思い出したり、時間のことを思い出させたりする。公共の場に気軽に時計があるのは、今でもそれなりの役割を果たしている。

だが、時計は始めから時を知らせるという以上に「まちづくり」の仕掛けだった。すでに古くから、ロンドンといえば独特な響きのビッグベンを思い出す。あれは独特の音色とともに、都市のシンボルだった。

時間になると人形が現れる「からくり人形」の時計はヨーロッパの各地にある。時間になると大勢の群衆が集まって上を見上げて待っている。やがて音楽が鳴り、人形が小さな窓から現れる。他愛のないものだが、けっこう観光客に受けている。ローテンブルグでは大盃の酒を飲み干すことを条件に、

攻めてきたスエーデン軍から街の破壊を救った大酒飲み市長が現れる。街の歴史も勉強させられるわけだ。からくり時計が動くのを見ようと、それまでの時間に合わせて街をぶらついている人も多い。これは街としては時計効果というべきだろうか。

街は住む人にとってはもちろん、旅行者にも楽しくなければならぬ。時計には、そんな働きがある。その意味で現在の「まちづくり」でも街に時計が置かれる。それは時計台のように、高い所から広い範囲の顔の見えない大衆に時間を知らせるためではなく、街を行く人に何気なく時を知らせるものであり、街を楽しくするためのアクセサリーだ。そうすると、特別に高い所に時計を上げておくよりも、身近のよく見える所に置いたほうがよい。

パリ郊外のセルジュポントワーズは、ダニー・カラハンが街全体をアートとして設計したということと有名だが、この駅を下りて街に入るところに、すぐ頭の上のそう高くない所に、ヨーロッパ一と称する巨大な時計が乗っていて、街のシンボルになっている。あの大きな時計があった街、ということが印象づけられるだろう。

道路に下りてきた新しい時計

時計は街に下りてきた。一九七四年に歩行者空間の横浜・イセザキモールでは道路の上に「からくり時計」を置いた。街の楽しさを演出するために、商店街が金を出し合ってモール化と同時に設置した。こどもたちへのアッピールを狙った白雪姫という案があったが、商人の街だからと、中世ヨーロッパの街の職人たちの姿になった。時間になると粉屋が粉を挽く、パン屋がパンを焼く、靴屋が靴の底を打つ。鍛冶屋が槌を振る。それが総ガラスの箱のなかで動いている。商店街のまんなかに、時間になると、ちょっととした楽しい空気を流してくれる。仙台の東一番丁のモールには、水が溜まるとボタンと倒れて水をこぼす単純なものだが、それでも街をなんとなく楽しくさせる「からくり時計」がある。こんな道路上の「からくり時計」は、今はすっかり一般化している。

道の上にとっしりと箱のように地面に置いたこの時計は、道路占用物ということで道路管理者の許可がいる。こうしたものの最初であったイセザキモールでは、それなりの苦労があった。管理者側か

らクレームがついたからだ。時計塔というものは、地面の所は細くポール状になっていて、その上に時計が乗るものだというのである。ところが、それまでの街にある時計は、建物の壁とか塔屋に取り

可か。こうしたものの最初であったイセギモ、それらの言がであった。管理(管理)からクレームがついたからだ。時計塔というものは、地面の所は細くポール状になっていて、その上に時計が乗るものだというのである。ところが、それまでの街にある時計は、建物の壁とか塔屋に取りつけられていたものが多かったから問題はなかった。この時計は中身のからくりを見せることに意味がある。それには地面の上に、人の目の高さ近くに設置されていることが必要だ。仕掛けを見せるには箱のような形になる。幾度もの議論の末に、これは時計ではなく、彫刻などと同じオブジェである、ということにして、やっと道路管理者を説得した。

もし道路管理者側の言うことを聞いていれば、昔のまだ個人が時計を持たなかった時代の街を見下ろす時計塔でしかない。街の楽しさを醸し出す身近な装置としての価値は半減する。今更ただの時を知らせるだけの時計なら街にいらぬ。時計もそれ以上の価値を「まちづくり」のなかで持たなければならぬ。

この後、道路上に設置された箱型の「からくり時計」の例はたくさんあるが、イセギモールで問題になったようなことは聞かない。風穴は開けられたのである。

最近亡くなったミヒヤエル・エンデの代表作に『モモ』がある。少女モモが、時間を奪ってしまった灰色の男たちと闘い、ついに時間をとり戻すという話だ。時間はただ物理的に流れて行くものではない。あくせくと無為に過ごしてしまふ人には、時間はないのと同じだ。時間は、それと気がつかないが、実は人間に与えられた最も貴重なものかもしれない。街に置かれた時計は、時間を豊かなものとして人々に気づかせ、語りかけ、教えてくれるものでなければならぬだろう。

たむら・あきら

1926年、東京都生まれ。法政大学法学部政治学科教授。まちづくり学会会長。運輸省などを経て、68年横浜市庁入り。企画調整局長として同市の街づくりに貢献、「都市空間創造の実践」として日本建築学会賞を受賞。81年から法政大学教授。街づくりには、「身近に森林があるのが望ましい」と力説する。著書に「まちづくりの発想」(岩波新書)「イギリスは豊かなり」(東洋経済新報社)など。

街に生きる時計たち 中巻 [東日本編]

1996年2月18日 第1版1刷発行

編者—————上野秀恒

編集制作—————企画制作四谷事務所

発行元—————クロック文化研究所

〒102 東京都千代田区九段南3-4-5

フタバ九段ビル5F

☎03-5276-2352

発売元—————NTTメディアスコープ

〒101 東京都千代田区神田司町2-16

NTT 神田ビル6F

☎03-5256-1101

印刷製本—————ダイヤモンド・グラフィック社

©クロック文化研究所 Printed in Japan

ISBN 4-87221-040-9 C0095
